

第37回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会 テーマ：大学の外国語教育－学生の学ぶ意欲を高めるために－

甲南大学国際言語文化センター主催による第37回言語教授法・カリキュラム開発研究会が「大学の外国語教育－学生の学ぶ意欲を高めるために－」というテーマで、以下の通り開催され、甲南大学の教員、学生、近隣の大学の教員や高校教諭、関東の大学教員など、73人の参加者があった。

開催日時	2014年7月5日（土）13時30分～16時30分
受付時間	13時00分
開催場所	研究会 甲南大学 5号館 1階 511講義室 懇親会 甲南大学 カフェ・パンセ
13：30	開会の挨拶 国際言語文化センター所長 教授 中村 典子
13：35－13：40	基調講演者紹介 国際言語文化センター教授 藤原 三枝子（司会）
13：40－15：00	基調講演

「外国語学習における動機づけを考える－動機を高めるための10の提言－」
講師 関西大学外国語学部・大学院外国語教育学研究科 教授 竹内 理氏

博士（学校教育学） 関西大学 外国語学部・大学院外国語教育学研究科 教授（学部長・研究科長）

【経歴】 神戸市外国語大学大学院修了後、米国モントレイ大学院へフルブライト奨学金で留学。同志社女子大学助教授などを経て現職。

【著書】 『外国語教育研究ハンドブッカー研究手法のより良い理解のために』（松柏社）、『より良い外国語学習法を求めて－外国語学習成功者の研究』（松柏社；大学英語教育学会学術賞受賞）、『達人の英語学習法－データが語る効果的な外国語学習法とは』（草思社）など。論文多数。

15：00－15：10	休憩
15：10	質疑応答 指定討論者からの質問（20分） 国際言語文化センター教授 中村 耕二 国際言語文化センター教授 金 泰虎
	会場からの質問（50分）
16：20	まとめと閉会の挨拶 国際言語文化センター教授 津田 信男
16：40	懇親会

《講演内容》

本講演は、講演者が一方的に話すのではなく、動機づけについて参加者も主体的に考える方法が採られた。配布されたハンドアウトは、「鍵」となる概念が空欄のままなので、参加者は、講演を注意深く聞くこと、場合によっては講演者から直接質問を受けること、あるいは参加者同士で意見交換することをとおして、自ら回答を考え、資料を完成させていくことが求められた。1時間半にわたる講演の間中、参加者の集中力が切れることが無かった。

以下に、氏の講演内容をハンドアウトの項目にそってまとめる。

1. 動機づけ（やる気や学習意欲）の重要性：何がなくても動機づけ

動機づけは、外国語のテストの成績が変動する場合、最大その60%を説明できる可能性があるという。やる気が出れば、外国語のテストをかなり上げることができるし、その逆も言える。動機づけがテストの成績、ひいては言語の学習全般に与える影響は大きい。動機づけをよく理解するために、まず動機づけを構成する3つの要素について考えていく。

1) 第一の要素：動機を引き起こすもの（内側からのものと外からのもの）

学習理由として、具体的に以下のものが挙げられる：

学習への興味（好奇心）

学習の必要性（切迫感）

学習を自分でコントロールできるという感覚（自己効力感）

学習環境（含む教員、仲間）への満足感

学習結果に対する達成感

達成への期待感

学習することによって得られる利益

外国語話者、外国文化圏への態度（好感度）

コミュニケーションしたいという欲求

学習を通して他者から認められたいという欲求（竹内、2007）

こうした学習理由には、自分の内側から湧き上がるもの（内発的動機）と外側からの圧力によるもの（外発的動機）とがあることが分かる。外発的動機の場合には、課題を早くこなそうとし、作業時間が短くなる傾向があることから、能力向上に結び付きにくい。内発的に動機づけられている場合には、学習方法を自ら工夫し、学習の継続・学習時間の増加により、能力向上につながる。従って、外からの圧力ではなく、楽しさやワクワクした学びが能力を付けるためには大事だということになる。

内発的動機づけとの関連で、外国語を学ぶことの意味が、国の発展状況と関わりがある

ことを考えてみたい。外国語を学ぶことは、発展途上国では「特権」であり、ある程度発展した国では「権利」であるが、発展しきった日本のような国では「義務」となる。外国語学習が義務化している環境では、外発的動機づけが強くなり、学習者を内発的に動機づけることが難しい。

2) 第二の要素：動機づけの可変性（どの程度長く続くのか）

動機はつねに変化する。上がり下がりするのが動機である。学習者の動機づけを調査する場合には、継続的・縦断的に調査し、上げた理由、下げた理由を追っていく必要がある。一週間、一日、一つの講演のなかでも、動機づけの強さは変化する。動機づけ研究の難しい点でもある。

3) 第三の要素：動機づけの強弱（動機はどの程度強くなるのか）

教師の行動や態度で学習者の動機は変容する。それでは、教師のどんな行動や態度が学習者の動機を高めるたり弱めたりするのだろうか。以下、「授業運営」、「教師行動」、「教師の態度」から見ていく。

＜学習者の動機向上のために＞

① 授業運営

机間指導。生徒ひとりひとりに話かける	時間厳守
教室内規律の重視	テストや評価方法を、明確に説明しておく
学生の名前を覚える	段取りがよい。授業内容を頭でレビューする

② 教師行動

声が大きいい	話の速さが適切
理解の確認を忘れない	板書を丁寧にする
具体的に褒める	きれいな発音で話す

③ 教師の態度

明るい、冗談が通用する	感情の起伏がない
公平感がある	

＜学習者の動機減退を招く場合＞

① 授業運営

遅刻をする、終わりの時間を守らない	段取りが悪い
なかなか名前を憶えない	

② 教師行動

何を目標にしているのか分からない	一方的説明だけで、参加感が無い
説明不足	進度・レベルが合わない
予告のないテストをする	声が小さい
話が早すぎ、繰り返しが無い	字が汚い
褒めない、表現がきつい	視線が合わない（上から目線）
訳ばかり（コミュニケーション活動がない）	英語を話さない（英語の授業）
発音がへた	

③ 教師の態度

やる気がない	感情が行動にでる（ひいきをする）
--------	------------------

〈性別や学力による反応の違い：傾向〉

- ・男女とも反応箇所は違わないが、女性の方が敏感に反応し、やる気をかえる
- ・学力の不十分な学生は、些細な事（進度が速い、表現がきつい、怒られる）でやる気を喪失
- ・学力の高い学生は、参加型を好み、教師中心型を嫌がる

まとめ：動機の3つの特徴

- 1) 動機を引き起こす要因は多様である
- 2) 動機はつねに変化する
- 3) 動機は教師の行動・態度によって、強くなったり弱くなったりする

2. 動機づけを高める10の提言

どうすれば外国語学習への動機が高まるのかを、10の提言としてまとめる：

1) 汝、教師の働きかけはタイミングが大切と心得よ

動機づけに大きな影響を与える要素は「教師」と「テスト」である。教師の影響力が上がってくると、テストの影響力が下がるというトレードオフの関係にある。教師の影響は、学期始めが高く、テスト前は、教師がどのようなことを言おうと、あまり関係しない。テスト後は、再び、教師要因が影響する。つまり、面白いことや新しいことをやるべき時期を考える必要がある。

学習者の動機づけに対して教材は直接的な影響をあまり与えない。教材のあり様が動機づけに影響を与えるのではなく、教師がどのように教材を使うかが影響する。

2) 汝、学習者の学力により対応を変えよ

上級レベルの学習者は、テストに早くから反応し先生への反応の落ち方が激しいが、先

生への反応はテストが終わり次第、すぐに戻ってくる。低いレベルの学習者の場合、テストに対しても直前まで反応せず、また、先生の多様な試みにもあまり反応しない傾向がある。

3) 汝、計画性を取り入れよ

授業では「目標」を提示し、その達成のために「指導」と「評価」をすることが大事である。メタ認知、段取り力、自己調整力を養成するためにも、授業の始め（あるいは単元の始め）に、本時の目標：何ができるようになるか (can-do) を明確に伝える。その際に、留意する点として、

- ・ 目標に手が届くという感覚を学習者がもつことができること
- ・ 目標は明確であり、分割されてスモールステップであること
- ・ 指導では、モデルを示して、やり方を見せること
- ・ 評価（振り返り）は、教師、仲間、本人が行うこと

4) 汝、チャレンジの要素を取り入れよ

自分の能力より少し上のことを学習者にチャレンジさせると、フロー状態 (Csikszentmihalyi, 1997) が起きやすく学習につながる。簡単すぎると学習者の自尊心が傷つき退屈になり、難しすぎると不安になる。フロー状態に持つて行くためには、チャレンジだけでなく、ある程度方法も教えてやる必要がある。加えて、やれば出来るという自己効力感 (Self-efficacy) の育成が役立つ。大切なのは、チャレンジと少しの「足場」(scaffolding) だと言われている。

5) 汝、成功体験と他者承認を大切にせよ

学習者の行動を承認してやることが大切である。褒める際のコツは、みんなの前で具体的に褒めること、叱るときは、皆の前では叱らずに、一般論として提示することが大切である。また、ダメな理由と改善策を提示してやると動機は下がらない。肝心なのは、他者と比較をせず、個人の絶対的伸びを認めることである。

《使うと動機づけを下げてしまう表現》

小学校

何をしてもだめやな	こんなこともわからんのか
この絵はできすぎや	学級委員のくせに
お兄ちゃんの方がよっぽどできるな	〇〇さんに聞きなさい
こんなクラスはもう知りません	

中学校

中学生になってもこんなこと分らないの	こんなこと常識だね
やる気あるのか	誰かに見せてもらったの
〇〇君を見習え	このクラスあかん
教師だって商売（人間だ）	

高等学校

なんで、こんなことも分らないのや	見込みないな
それでも勉強しとるんか	去年のクラスの方がよかったな
本当は教師なんかたりたくなかったんや	ぼくは〇〇大学（有名校）の出身や
この中でだれも国立大学へ行けるヤツはおらん	

(辰野、2009；一部改編)

6) 汝、テストや成績評価の方法を改善せよ

目標と授業内容とテストを一致させることが肝心である。レベルによってテスト対応を変えることも考えるとよい。例えば、中・初級群に対しては、テスト内容を事前に公開し、上級群には、外部と競わせる工夫をする。評価に際しては、採点基準を明確に示す。

7) 汝、仲間を忘れるなかれ

学習の継続はなかなか1人では難しいので、仲間との協働作業、ピアサポートが重要である。一人よりも複数で行った方が、効果も上がる場合も多い。例えば、班の中では協働学習をさせ、他の班と対抗学習をさせると、関係性を大事にしたいという思いと、競いたいという両方の欲求を満足させることができる。協働学習では活動に加わらないフリーライダーを減らすために、役割の分担を行うことがよいだろう。

習熟度別クラスの問題点として、均質な人ばかりのクラス構成の場合、目標となる学生がいないことにより、個人の上達が難しくなることが挙げられる。習熟度別編成の場合にも、ある程度のレベルの幅を持たせた緩やかなクラス編成をする必要がある。上達するには（手の届く）ライバルが必要となる。

8) 汝、振り返りを侮るなかれ

自分の達成状況を定期的に、グラフなどで可視化して確認するとよい。評価は総括的評価ではなく、細やかに途中評価を行い、学習者が何をすべきかを具体的に示す形成的評価が望ましい。

学習のプロセスを長期的に残すためにポートフォリオや日記の活用が考えられる。外国語学習を定期的に自分で振り返り、管理することが望ましい。

9) 汝、自己学習を刺激せよ

外国語の習得には、学習開始年齢よりも、どれほどその外国語に接したかの接触時間が影響を与える。学習に成功するためには、自宅学習が大切だが、その質や方法、宿題のあり方が問題になる。宿題には「授業の円環」(竹内、2007)が必須で、授業でやったことが宿題になり、宿題で行ったことが授業でも扱われるような関連性を持たすことが必要である。

10) 汝、学習方法を伝えることを忘れるなかれ

学習方略を明示的に扱うことが重要である。例えば、単語学習の場合には、聞いて、見て、書いて、声に出して、体を使って「多重経路」で学ぶように指導する。また、「文」や「文脈」に埋め込む学習は効果が上がることや、実際に使うことの大切さなどを教える必要がある。

3. おわりに

講演の最後に、動機づけ研究の分野で第一人者であるハンガリーの Dörnyei, Z. と、Chomsky, N. のテキストが引用された。Dörnyei(2001)は、本当に外国語を学びたいと思っている人(意欲のある人)の99%は、外国語学習適性にかかわらず、少なくとも、かなりの程度、それをマスターすることができる、としている。また、Chomsky (1988)は、教師の仕事の99%は学生に興味を持たせることで、教え方の問題はわずか1%に過ぎないこと、試験のためではなく、学習は内面から起こらなければならないこと、学びたいという思いがあれば、教え方は関係ないと述べている。

参考文献 (講演の中で言及されたもののみを抜粋)

- Chomsky, N. (1988). Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures. Massachusetts: MIT Press.
- Csikszentmihalyi, M. (1997). Finding Flow: The Psychology of Engagement with Everyday Life. New York: Basic Books.
- Dörnyei, Z. (2001). Motivational Strategies in the Language Classroom. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 杉田麻哉、竹内 理 (2007). 中学校の授業外英語自主学习における動機づけ要因 - 学習の動機を高めるのは何、そして誰? 『英語教育』, 10月号, 大修館書店: 65-67.
- 竹内 理 (2003). 『より良い外国語学習法を求めて—外国語学習成功者の研究—』松柏社.
- 竹内 理 (2007). 自ら学ぶ姿勢を身につけるには—自主学习の必要性とその方法を探る—Teaching English Now. 8, 2-5.
- 竹内 理 (2012). スローラーナーに寄り添う—自己調整学習の観点から— 『英語教育』, 7月号, 大修館書店: 39-41.
- 辰野千尋 (2009). 『科学的根拠で示す学習意欲をたかめる12の方法』図書文化.

《指定討論者との質疑応答》

・中村耕二先生からの質問：

① 最近、上級クラスでも、積極的に話すということに臆する学生が増えている。彼らの話す意欲を向上させるためには、どのような方策が考えられるか。

(竹内先生) 確かに、ペアワークがうまく機能しないという傾向が感じられる。恐らく、何を話したらよいかの分が分からなかったのではないかと考え、話の内容を4点に限定したところ、ある程度の会話が行われた。ペアワークが上手くいかない場合には、まず日本語でブレストリングさせてから取り組む・会話の内容を限定する・机間巡視の際により内容について、教師がペアとやり取りをして皆にモデルとして見せる、などが考えられる。

② 文部科学省の指導（英語での授業など）についても、先生方の動機づけをどのように向上させるか、についての方策が必要だと思う。教師が変わらなければ授業は変わらない、学生も変わらない。

(竹内先生) 先生が、英語での授業という文科省の要請に対して抱く不安を下げるのが重要だろう。先生が英語で講義しようと構えるのではなく、アクティブラーニングや、ペアワークやグループワークなどの授業形態の工夫により、学習者に話す機会を十分に与えるようにする。また、文法を英語で説明することは至難の業。むしろ説明部分は日本でを行い、その後、場面を設定してそこで学習者に英語で話してもらい、という方法の方が効果的である。いずれにせよ、教師の話す割合を抑えて学習者に話させることが重要である。

・金泰虎先生からの質問：

① 教授法と動機づけの関係について、同等のレベルとみなすのか、あるいは動機づけの中に教授法が入るのか、二つの概念の関係性について、教えていただきたい。

(竹内先生) 「教授法」も「動機づけ」もそれぞれ別領域と捉えている。どの教授法であっても動機づけに影響を与えるので、独立した分野のものと考えている。

② 動機づけの対象がもっと明確であった方がより効果的な内容となったと感じる。また、国の発展と外国語学習の位置づけについては分かりやすいが、普遍化することは危険だと思う。例えば韓国は「発展しきった国」とは言えないが、外国語学習がつねに義務化されてきた。

(竹内先生) 講演では、これまでの多様な研究を総括して話した。確かに小学校から大学生まで対象者の違いにより、方法と動機づけのあり様が異なることがある。例えば、「訳」に対する否定的な態度は高等学校のケースでの話で、私個人としては訳をすることがよい時もあり得る、という考え方をもっている。つまり、ある程度話すことに抵抗がなくなった後に、文の構造や背景になっていることをしっかりと確認することは意味がある。

韓国の外国語教育は興味深い例である。日本の場合には人口の大きさから、国内で完結することができ、外に出る必要性が低いという特徴がある。韓国は人口から考えても、国外に出る必要性が日本に比べて高いと考えられる。韓国の学習者に英語の熟達度の高さについて尋ねると、「必要だから」という返事が返ってくる。必要性が学習成果に与える影響が強いことを実感する。

③ 習熟度別のクラス編成について、甲南大学のこれからの検討課題ではないか。

(竹内先生) 習熟度別のクラス編成自体が問題ではなく、細かく分けすぎること（でモデルがなくなること）が問題だと理解している。大まかに分けることにより、切磋琢磨できる環境を提供できると考える。

④ 甲南大学の韓国語では、形成的評価を取り入れている先生がいるが、その場合、教師の負担が非常に大きいと感じる。

(竹内先生) 一つの言語の試みを他の言語でも共有していく環境が大切だ。最初に学生に100点を与えて、教師が最後まで学生の学びを管理していく（その韓国語の先生の）方法など、成功している試みを言語間で共有することが大事だと思う。

⑤ 動機づけを考える上で、日本社会を知っておく必要があるのではないか。自己表現をしない社会など、教師として日本の文化を知ったうえでの指導が必要だと思える。

(竹内先生) 重要なことである。自分の英語の授業では、コミュニケーションの時間なので、まず大きな声であいさつをすることを導入している。授業以外の場でもそのように接することで、日本文化を背景としていても、大きな声での応答が可能になる。

(中村先生) 私の授業では、学習者が訳をせずに、意味段落に分けたり要約をするなど読み方の訓練をしながら、英語でのプレゼンテーション能力の養成をすることに心がけている。

(竹内先生) モデルに沿って課題をこなす場合でも、学生には、一つだけでも自分の考えを盛り込むように指導すると良いと思う。

《会場との質疑応答》

質問紙による質問

質問用紙に書かれた多様な内容を、竹内先生が共通する概念ごとにまとめて回答された。

(会場からの質問) 日本人の自己効力感の低さに関する質問：

(竹内先生) 最近、裏付けのない自己効力感をもつ学生のケースが問題となっている。自己効力感を伸ばした方がよいとばかりは言えず、「自分はやったらできる」、と思ったま

ま、学ばない学生もいる。本当にできるかどうかをチェックしていく必要がある。こちら辺が自己効力感理論の限界であるかもしれない。根拠のない自己効力感を持った学生には、本当の実力を本人に示すしかない。

(会場からの質問) フロー状態が起こる条件に関する質問：

(竹内先生) チャレンジを与えることが基本だが、そのチャレンジ(目標)がスモールステップである必要がある、一つずつクリアしていくような形がよい。方法が学習者に明確に分かっていることが大切なので、方法をきちっと理解させた上で小さなステップを積み上げることが重要だろう。

(会場からの質問) 受験勉強と動機づけの関係に関する質問：

(竹内先生) 受験勉強は、典型的な外発的動機づけであるので、学生は勉強の方法をあまり工夫しなくなる。ただ、勉強の工夫について話し合うことで、できるだけ内発的な動機づけにもっていくことはできる。心理学の理論である自己決定理論は、たとえ外発的な動機づけで始めたことであっても、関係性がよく、自己効力感を大切に、自己決定性が考慮された学習環境では、外発的な動機づけが内発的な動機づけに変わっていく可能性がある」と述べている。

(会場からの質問) 褒めることもよいけど、叱って見たらどうか：

(竹内先生) 叱り方次第だと思う。今後そのような研究があれば、是非知らせて欲しい。

(会場からの質問) 協働学習時に、言語の能力差が大きすぎる場合の問題と人数に関する質問：

(竹内先生) レベル差が大きすぎると、できる学生は、「なぜできないの?」、できない学生は、「あんな風にはなれない」という思いによって、よい結果にはつながらないことが多い。協働学習の(最適)人数は、タスクやグループ内の人間関係、能力差によって変わるので、一概には言えない。ペアよりはグループの方が上手くいくことが多いように思うが、ライティング課題では、グループの場合、全員の分を見ることができないこともあり、ペアワークがよいかもしれない。いずれにせよ、協働学習の理想的な人数は、場合によるということになる。

(会場からの質問) クラスの中に多様な学生がいる場合：

(竹内先生) 授業運営は難しいが、レベルが極端に異なる場合には、教え合う、ということも考えられる。あるいは、2グループに分けて、課題をさせるグループと教師とのインターアクションを行うグループに分け、授業をすることが考えられる。多様な学生がいるクラスでは、CALL 教室などでメディアの力を使い効果的に授業することが考えられる。

(会場からの質問) 教材の与える動機づけへの影響：

(竹内先生) 教材が学習者の動機づけに与える影響は少ないと言ったが、教材と学習者の動機づけを考える際には、教師が教材をどのように使うかが重要である。よい教材をうまく利用することが学習者の動機づけにつながる。教材が学習者の動機づけに与える影響というのは、教材単体の影響ではなく、その教材を先生がどのように使うかが問題となる。先生の使い方によって、教材は生きてきたり死んでしまったりする。教材を使いながら、先生が個性・独創性を出すことも大事なので、先生の研鑽が肝心だ。

(会場からの質問) 言語との接触時間を増やすことに関する質問：

(竹内先生) 現在はインターネットなどを使い、目標言語との接触時間を増やすことは比較的楽になってきていると感じる。加えて、(英語などでは) 言語を使うことができるような環境になってきた。以前は聞くことと読むことはできても、使う機会を得ることが難しかったが、現在は、留学生と話すなど機会も増え、接触時間を増やしやすくなったのではないだろうか。

(会場からの質問) 外国語を学ぶことも大事だが、自国の文化や歴史を理解することが大事では：

(竹内先生) グローバル人材=外国語を操ることができる人間ではなく、自分の国のことが分かったうえで、世界の人とかかわることができる人間がグローバルだと思っている(『兵庫教育』2014年8月号掲載の拙論を参照下さい)。私たちはこう思うが、あなたがたはどう思うか、というディスカッションをつうじて妥協点を探っていく方が、グローバル人材としてふさわしいのではないかと思う。自国の文化や歴史は、外国語と同時に学んでいくべきことだろう。

(会場からの質問) 授業を早く切り上げる教師についての質問：

(竹内先生) 少しの時間でも回数が重なるとかなりの時間になる。職責上、チャイムが鳴ったらすぐに始め、終わりのチャイムが鳴ったら授業を終えるような運営をお願いしている。また、自分もそのように実践・努力している。

(会場からの質問) どのようにしたら動機づけを継続していくことができるか：

(竹内先生) 個人的な体験からであるが、学校外での学習では、例えば海外に行った場合などには、人間関係を円滑にして、多くの友人をつくり話す機会をもつようにすることが有効な手段だろう。

(会場からの質問) ラジオ講座を継続するためには：

(竹内先生) 4月の販売冊数と期末のそれとはかなり異なると聞く。ラジオ講座ほど一人

でやるのではなく、協働で行ったらどうだろうか。ラジオ講座プラス α があればよいのではないか。

(会場からの質問) 小中高で行うべき学習方法：

(竹内先生) 初級・中級・上級どのレベルでも、「使う」ことを考える必要がある。使わない外国語学習はない。インプットだけでは十分でないので、どんどんと使用させることが大切である。

(会場からの質問) 興味もなく動機づけも低い学生への対応：

(竹内先生) (講師の) 勤務校のロシア語の授業を参考にして考えると、最初の動機づけが低い場合にはとくに、その国の文化や人々に興味を持たせると意欲が高まることがあるように思う。

会場からの口頭質問

(会場からの質問) 入試の問題点に関する質問：

(竹内先生) 最近のセンター試験を見ると、単語の意味を推量する力などを見る問題などもあり、多様な学習方略を必要とする問題が出てきていることも事実である。ただ、関西では、有力な大学の幾つかが和訳の問題を取り入れているので、受験生の中では、和訳のストラテジーはなかなか外せないと思っているのではないか。試験はウォッシュバック(波及効果)が非常に大きいので、試験問題をどのような形式で作成するかがとても大切である。例えば、並べ替えでは、学習者のコミュニケーション能力を測ることはならない。発音問題についても、知識として知っているのか運用できるかは別、という可能性もある。

(会場からの質問) 外国語の発音のカタカナ表記の問題：

(竹内先生) とりわけ小学校では問題と思われる。できるだけ発音に忠実に、自然なカタカナ表記を考える場合(筑波大学・島岡先生の試みなど)もあるが、いずれにせよ、耳でよく聞いて、真似て口で発音する訓練がなによりも大事だろう。

(会場からの質問) 教科書の中で扱われている文化、ハロインなどについて：

(竹内先生) 公立学校で使用する教科書では宗教ネタを扱うのは難しいが、宗教は文化と切り離せないところもあるので、どこの宗教についても偏らない工夫が必要。ハロインはその宗教性が比較的薄いので、教科書で扱えるテーマであると思う。

(会場からの質問) 言語学習の適性について：

(竹内先生) これまで「言語習得適性」(言葉をどれだけ覚えられるか、ことばの中から

どれだけルールを導き出すことができるか)の研究はあっても、「言語コミュニケーション適性」の研究は非常に少ない。適性と動機づけとの関連に関わる研究は少なく、まだ本格的な研究は行われていないと思う。面白い研究テーマであろう。コミュニケーション能力の高い人は、相手からのフィードバックをもらうことができるので、動機づけを維持できるのではないかと考えている。適性の研究は、現在、コミュニケーションとの関係で再び注目され始めたのではないか。

閉会の挨拶 津田信男先生

閉会の挨拶では、講演者竹内理先生への感謝とともに、1時間半の講演が非常に短く感じられ、まさに、フロー状態で講演に参加することができたこと、また、参加者が講演を聞くことによって自分で完成させる形式のハンドアウトは、レジメとして素晴らしいものであったことが述べられた。教師の教室運営や態度によって、学習者の動機づけが変容する可能性があることは常々感じていることで、自分の授業でも学生の名前を覚えることを大切にしていることが紹介された。最後に、研究会に出席された先生方、学生諸君への感謝が述べられた後、閉会となった。

37回言語教授法カリキュラム開発研究会を終えて

本研究会では、講演者の竹内理先生より、私たち外国語教育に携わる教員が明日の授業に取り入れることができる具体的で有益なたくさんの提案を頂いた。講演、指定討論者および会場からの質問に対する回答と、3時間におよぶ研究会は、時間の経つのを忘れるほどに、中身の濃い研究会であった。学生との関係性が動機づけには大事であるように、本講演も、講演者と会場がつねに協働作業で行われたように思う。甲南大学の教員や学生、近隣の大学や高校の先生方、さらに関東の大学から参加された先生方、多様な機関で外国語教育に携わる先生方がともに、よりよい外国語学習を考えるよい機会となった。長時間の講演、多くの質問に丁寧に答えていただいた竹内理先生に心から感謝したい。

(文責：藤原三枝子)